

続・演奏者として



北見医師会
オホーツク海病院

水谷保幸

北見の地で働かせていただいて5年が過ぎた。北見医師会報に自己紹介の意味も込めて『演奏者として』という文章を書かせてもらってから5年が経ったことになる。ジャーネーの法則を引くまでもなく、年を取ると時間が経つのが早い。執筆を依頼されることはそんなに多くはないのだから、この時間の経過を含めて続編を書くことにした。続編なのだから(という言い訳で原稿の再利用！ 北見の先生たちスママセン)、当初の文章がなければ話は進まない。

『演奏者として』(2010年8月)

医者になるずっと前にクラリネットという楽器に出会い、天命をとうに越えた現在もまだかかっている。仕事が忙しくて、数ヵ月から2年におよぶ楽器に触れない期間があっても、また演奏者に戻ることができるのも、不思議な縁に導かれたこと。今年の初めから北見で働かせていただくこととなり、今回は1年半のブランクを経て、また演奏者となった。子どものころからピアノやバイオリンを習った多くの人にも、楽器を演奏することを仕事にしていなくて、一定の年齢を越えると続けていくのが億劫になるようだ。年を取るとともに技術は衰え、「演奏したい」ことが自分の技術で表現できなくなってくることを機会に、現役を引退することも多い。花伝書によるまでもなく、現役引退を選択することは、「晩節を汚す」ことから逃れることでもある。

少しマニアックな話になるが、アイヒラー先生と今年も東京でお会いすることができた。「日本のクラリネットの父」と呼ばれる先生は、クラシックのファンなら耳にしたことのあるであろうレオポルド・ウラッハの直弟子で、NHK交響楽団に在籍されたのは1952年からで、東京芸大を始め多くの日本の音楽大学で指導され、今も使用されている「アイヒラーのスケール」の著者でもある。ちょっとまって！ ウラッハの弟子？ 1952年にN響って？ そう、先生は80歳を超えた、現役の演奏者なのだ。数年間お休みしていた東京でのクラリネットクワイアーに北見から3人の仲間をつれて出演した演奏会で、ご一緒することができた。今なおかくしゃくとされており、新しい教則本を出版することをうれしそうに語られた。

演奏者は孤独で、自らが譜面の奥底を探求した成果を、お客様と共有する場が唯一の(録音活動

は別として)表現の場である。技術を磨くのは「自らの音楽のため」であり、それ以上でも以下でもない。音楽を鑑賞することの多くは、技術を探る(評価する)ことではなく「何が表現されているのか」を感じる(けっして解析して分かることではないと思う)ことだと思ふ。幸いにして、合奏という形態で、まだ必要とされ(そのための最低限度の技術を維持しなければ)私はかろうじて演奏者として成り立っているようだ。もう少しだけ演奏者としてのかかわりを続けてみたいと考えている。北見で若い子に交じってどこかで演奏している、その場に似合わないクラリネット吹きを見かけたら、きっとそれは私です。

忘れるのではなく、覚えることもできないスピードで時間が通り過ぎていく。幸いなことに、周りの若い人たちの力のおかげで、ここ5年の間に東京(紀尾井)、札幌(Kitara)は別として、青森(市文化会館)、福岡(サンパレス)、新潟(リユートピア)とステージに乗せてもらうことができた。演奏者を続けていなければ(いや、続けていても仲間たちとの出会いがなければ)こんなチャンスはなかったと思う。覚えることができないのだから、当然のように、その時の写真を見ても、どうにも演奏の細部を思い出すことができない。しかし、演奏の感動だけは自分の中にしっかりと残っている。いつか演奏ができなくなっても、この感動が心にあるかぎり、「音楽家もどき」であった自分にも残されているものがあるのだと、しみじみと思うようになった。

最近、昭和の名役者さんたちの訃報を多く目にするようになった。最後の作品に出演してからお亡くなりになるまでの時間には、かなり大きな差があるようだ。演奏者はどうだろうか？ これもどうにも差がありそうだ。晩節を汚す？ 格好良くないと思われても良い！ 目指せ、演奏者としての「ぴんぴんコロリ」(医師会の文章なのにスママセン)。

私にとって音楽にかかわる時間は、誰かに何かを伝えようとする(意味や論理ではなくて)自分を通して、自分自身を反省し、そして少しでも高めていける大事な時間でもあると感じている。上手くなることだけを目標としていた「音学」や「音我苦」から、ようやく「穩楽」が見えてきたようだ。もう少しだけ、いろいろな場面でジタバタしてみたいと大人げなく思っている。また今週も孫のような仲間たちと会うために、最近特に重さを感じるようになった楽器を抱えて練習場に向かうとしよう。

P. S. アイヒラー先生はますますお元気で、昨年もお一人ではるばるウィーンから東京に来られていました。

